

館報

No. 25

1982. 1.

徳島高工図書館追憶の記
講義ノートの思い出からの雑感
研究者のための国立大学図書館
の相互利用が円滑化

附属図書館第4回文化行事
「近世阿波の史料展」報告

第22回中国四国地区大学図書館
研究集会を終えて

徳島高工図書館追憶の記

稲田貞俊

昭和12年4月、徳島高等工業学校機械工学科(徳島大学工学部の前身)入学のため、箆を背負って徳島市を初めて訪れた。南常三島町の老松の並木道に沿って東にすすめば、左側に師範学校、つづいて徳島高工の建物が見られた。徳島高工正面玄関前の蘇鉄の巨木の右わき門から、満開の桜アーチをくぐって、標本道路の終るところ、芝生を前面にして、屋根全体が緑青でおおわれた講堂があり、その北裏側に図書館入口があった。本館は標本道路と平行に、その左側にあり、機械1年の教室は本館の東南の角であった。ここで、沼先生、横瀬先生等機械科の先生方の講義、東先生、蒲地先生方の共通学科の講義を受けた。平野先生の数学は2階共通教室で土木科学生との合併授業、造賀先生の物理学は階段教室で講義を受けた。

一年生初めての夏休みに入る直前、造賀先生よりデュンカン・スターリングの物理学テキストを紹介され、図書館入口の石段を初めて上った。当時、図書館には富永さんが主任をされて居られ、三浦さんが富永さんの手助けをされて居られた。ここで図書館の貸出、返却の手続きについて教えて頂いた。事務室につづいて、レンガ作り2階建?書庫のせまい鉄扉を押して入ると、あかり取の東側小窓からは、松林にかこまれた武道場、西側の小窓からは講堂の一部が見えた。図書館には、その後一度モーレーの材料力学を借り出しにいった記憶がある。しかし、図書館には余り出入りした記憶はない。

昭和15年4月、縁あって、母校の教師として、徳島高工機械工学科に勤務するようになってからは、機械教官室が図書館に一番近いこともあって、図書館には足繁くかよった。もともと、多読・乱読の性癖の私は、文学書にも手を出したり、哲学書にも手を出した。文学書では、クオ・ヴァデス、哲学書では数理哲学が心に残っている。富永さんからは、よく阿波狸合戦の話をか

がった。この図書事務室につづく、小さい会議室では、土木の上野先輩から母校卒業生のため、校友会（工業会）についての話をうかがった。

夏休みに入ってから、奥村先生が図書館の在庫調べをされるのを手伝った。この作業は一週間位かかったように思う。このとき、図書館にインター・ナショナル・クリティカル・テーブルがあることも知った。

昭和17年12月応召。東満総省雜寧に駐屯してからは、しばしば、三浦さんから、文藝春秋を送って頂き、同時に母校の事情をなつかしくうかがわせて頂いた。

終戦直後、図書補充のため原田先生と京都に出張し、専門古書をリュック一杯買い集めて帰って来た。当時、文献入手の方法としては、まず文献の所在場所を探し、35mmカメラを持参して、四本足を立てて、接写しなければならなかった。現在の図書館では、居ながらにして、ほとんど欲する文献のコピーが短期間に入手できる便利さを思うとき、隔世の感がある。しかし、同時に古い良き時代がなつかしく思い出される。

(工学部教授)

講義ノートの 思い出からの雑感

石田 行雄

昭和17年9月、大学へ入学した時、本屋が専門書として10数冊を置いて行った。当時は戦時中であつたのでほとんど独乙語の原書であつた。その中には上海本（中国の上海市にて作られた海賊版）として印刷のあまりよくない西欧の原書のリプリント版も含まれていた。本もなかなか入手し難い時代であつたので何のように役立つかも判らないまま大金を払って購入した。これらの本は講義ノートの補習に大切な参考書であつた。

さて、当時の教授の講義ノートは極めて貴重であつた。その講義内容を理解することは最先端の学問を知ることであり、それ以上のものを求めるには外国の単行本か、学術雑誌のオリジナルの報告を読まなければならない。私は生来悪筆なので講義ノートの作成には苦心した。友人の現、岐阜薬大のK教授は極めて達筆で、教授の講述をそのまま書体をくずさないでノートにとって行くのがうらやましかつた。彼は講義中によく私の傍に居たが、時々私のノートを見せてくれという。私はきたないノートを見られるのがいやなので、わからないところは私が読むからと云つてもいいから見せろと持って行かれ困惑したことを思い出す。私も内容を聴きのがしたり、理解出来ない処は友人に見せてもらつたり、原書または文献を調べて書き込み、さらにもう一度清書して、目次、索引等を付けて手製で製本する。現在ではほとんど見ることはないが、卒業後も何かに付けて参考にして利用した。

当時の講義はノートのみであり、植物化学のS教授は細々とした口調で淡々として講述される。その内容は深く量が多いので一度でも欠席すると、ノートをうめるのに大変であつた。勿論、友

人のノートを借りるが理解に苦しむ処が多く、却って時間がかかるので余程の事が無い限り欠席しなかった。薬化学のO教授と分析化学のI教授はガリ版を製本したものが講義に使用された。これには講義内容の骨子と簡単な図解がされているのみで、その説明を講義でされた。O教授は早口で、右手にチョーク、左手に黒板ふきを持って、複雑な化学構造式を次から次へと書いていられるが、書くと同時に左手で消されるので、チョークの粉が黒板を滝のように流れていたのが今でも目に浮かぶ。有機化学の電子論としては最先端であり、その内容を理解するのに相当苦心した。友人に尋ねてもわからず、図書館に行って散々調べてやっとつかんだ理論を得意になって友人達に説明する、また友人がその反論を調べて来て議論に花を咲かせたときが、学生として最も幸福感にあふれた時であった。結論が得られず、O教授に説明を求めると教授は実は私もわからないのだ、諸君が勉強して将来解決してくれと云われ、学問の何たるかを知らされた思いがした。

当時も、先輩が自分のノートをガリ刷りして製本して高価に売っていた。しかし、その内容には間違いもあるし、また内容の範囲が違う処もあるので私は利用しなかった。

最近の学生もなかなか上手に私の講義をノートにとる人も多い。学生諸君のノートを借りて来年度の参考にしたいと思うが実行したことはない。しかし、中にはあまりノートを取らず、その上講義に出席もしないで、友人のノートを盛んに売店でコピーしている。試験日が近づくと、各教科に対する対策委員がクラスの中から選ばれて、問題を設定して、その解答文を作り、これをコピーしてクラス中に配布する。学生諸君の中にはこの解答書のみを暗記する人もある。解答文が正確であればまだよいが、中にはひどい間違いもある。彼等は丸暗記しているので、同じ様な間違った解答文が出て来る。私は本年度の試験の傾向を変えて見た処、その問題に対して満足な解答が一つもなかったのに驚かされた。

私は現在の学生諸君の試験対策方法を非難しているつもりはない。現在では多数の国内の参考書があり、その上、印刷技術の進歩により、それなりの方法はあるはずである。しかし、講義ノートの意味を理解し、その内容の真実をつかむ様に、自ら勉強して理解し学問の本質に目を向けて欲しい。

このような現象は情報量の増大による情報時代の到来によるものである。教育の面のみならず、研究方法に対する情報の処理には頭を悩まされる。私の教授室も家の書齋も本や文献で一杯になりその整理する場所もない。知りたい報告は数限りなくあり、コピーして集めるだけで安心する場合が多い。研究を進めて行く上には余り情報を知らない方がよい場合もある。「盲、蛇におじず」である。ある程度成果を得て文献を調べればよい。しかし、人の考えることは同じである。研究を続けて行くうちに如何に学問的世界は広いが、文献を調べると研究の恐ろしさが身に沁みる。

情報とは何んであろうか？ある人の本によれば、情報もエントロピーとして二者択一のビットで計算出来ると云う。カード16枚の1つを当てるには $\log_2 16 = 4$ であり4ビットである。このビットにすれば情報量のかずが1万でほぼ13ビット、1億でほぼ26ビット、1兆で40ビットならずで、ビットで計算するとなにほどもないといわれる。熱力学の法則によればエントロピーは増大する。この事は情報社会にも当てはめられる。人類社会は進歩するに従って情報のエントロピーは

増大している。特に、近年のエントロピーの増加ははかり知れないものがある。エントロピーとは自由拡散であり、でたらめさであり、無秩序さである。私達の生活は情報のエントロピーの増大によって大いにかく乱されている。

また、熱力学の法則から、

「自由エネルギー」＝「全エネルギー」－「反エントロピー」である。ここで「反エントロピー」とは秩序であり、整理、整頓であり、ある意図するものを選ぶことである。例え情報量が多くても何を知りたいかを設定することによって情報のビット数は減少する。いいかえると自由エネルギーの減少となる。研究目的をたてて十分に考察することは「反エントロピー」の獲得である。「反エントロピー」の獲得こそが学問の本質ではないだろうか。

ある大学において図書費の予算獲得の為に会議を繰り返した。やっと図書が購入されるころには会議で疲れた頭は図書を読むという本来の目的にすっかり気力を失っている。図書委員はエントロピーの獲得のみにエネルギーを消費したのである。

人類はまさに地殻変動のような自然現象や原爆等々の巨大なエネルギーの増加によって破壊されるばかりでなく、人間集団の内部から発生した激しい勢で押し寄せて来る情報のエントロピーによって圧殺され滅亡するしかない。

誰れが人類を救う「反エントロピー」の創造者になるのか？

—— マックスウェルの悪魔より ——

(薬学部教授)

研究者のための国立大学図書館 の相互利用が円滑化

従来、他大学図書館を利用しようとするときは、館長名の紹介状を利用館宛に発行してきましたが、このたび相互利用を円滑化するために、国立大学図書館協議会は、昭和56年6月23日開催の第28回総会において、相互利用のための「実施要項」とそれに関係する「細則」を採択して、共通閲覧証による新しい相互利用制度が、昭和57年1月15日から実施されるようになりました。大いに御利用下さい。利用申込等については、図書館運用係(閲覧カウンター)にお尋ね下さい。この制度は学部学生には適用されませんので従来どおりの方法で申込んで下さい。



国立大学図書館間相互利用実施要項

1. 目的

この要項は、国立大学に所属する研究者の研究・教育活動に資するため国立大学図書館に所蔵されている図書館資料の円滑な相互利用を促進することを目的とする。

2. 対象

この要項は、国立大学図書館協会に加盟している大学図書館間における研究者による相互利用に対して適用する。

3. 定義

この要項における用語の定義は、次のとおりとする。

- (1) 国立大学図書館：各大学において附属図書館を構成する中央図書館、分館、部局図書館・室をいう。
- (2) 研究者：国立大学に所属する教職員、大学院学生及びこれに準ずる者をいう。これに準ずる者は、その者が所属する大学の附属図書

館長が認める者をいう。

- (3) 相互利用：研究者が他国立大学図書館に向いて、その所蔵資料を直接利用することをいう。

4. 相互利用の範囲

相互利用の範囲は、館内における閲覧を原則とし、その方法は当該大学図書館の定めるところによるものとする。

5. 相互利用の手続

相互利用を希望する研究者は、あらかじめ所属大学の図書館長に申請し、「国立大学図書館間共通閲覧証」の交付を受け、利用時にこれを利用受入館に提示するものとする。「共通閲覧証」の様式は別に定める。

6. 相互利用の制限

利用受入館は、当該大学に所属する利用者の利用が著しく妨げられると判断した場合には、相互利用を制限することができる。

国立大学図書館間相互利用実施細則

1. この細則は、国立大学図書館間相互利用実施要項に掲げる目的を達成するために必要な事項を定めたものである。

2. 相互利用方式

要項にいう「国立大学図書館間共通閲覧証」による共通閲覧証方式とするが、従来より実施中の他の方式を排除するものではない。

3. 国立大学図書館間共通閲覧証

- ア. 様式は別紙のとおりとする。

イ. 有効期間は当該年度内とする。

ウ. 本証利用上の注意事項の周知に努める。

4. 利用受入館

要項3の(1)にいう国立大学図書館であるが、当該大学の事情により、1大学で中央図書館のみが利用受入館となることがある。

5. 相互利用マニュアル

各館の利用上の留意事項を盛り込んだ相互利用マニュアルを全館が所持するものとする。

国立大学図書館間共通閲覧証申込書						
部局	学科		職名		年	氏名
	専攻		DC MC			
申込日	昭和 年 月 日					※No.
現住所	(〒)					方Tel.
備考	学内連絡先Tel.					

注意 ※印欄は記入しないで下さい。

附属図書館

国立大学図書館間 共通閲覧証	
※ No. _____ 昭和 年 月 日	
国立大学図書館協議会 加盟館長殿	
附属図書館長宛	
所属	_____
身分	_____
氏名	_____
本学の上記の者から、貴館資料を利用したい旨、申し出がありましたので、閲覧の便宜をお取り計らい下さるようお願いいたします。	
[有効期間:昭和 年3月31日まで]	

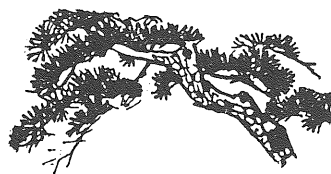
〔本証利用上の注意事項〕

1. 利用受入館入館の際には、本証と身分証明書あるいは名刺を提示して下さい。
2. 閲覧利用は受入館の規則に従って下さい。
3. 特に希望の資料を閲覧したい時は、前以って、その資料名を受入館へ連絡して下さい。当館に連絡のための用紙を備えています。
希望資料の所在など不明な点があるときには、当館で尋ねてから出かけて下さい。
4. 本証の記載事項に変更があった場合は届け出て下さい。

本証発行館電話

☎ _____ (ext. _____)

(共通閲覧証-裏-)



附属図書館第4回文化行事 「近世阿波の史料展」報告

第4回文化行事「近世阿波の史料展」が11月11日(水)から17日(火)までの7日間、本館の視聴覚室を会場として行われ、特に14日(土)午後と15日(日)は学外者にも一般公開した。

展観資料のなかで、阿波藩の蜂須賀家に仕えた1802家の成り立ちと系譜を記した附属図書館所蔵の「阿波藩蜂須賀家臣成立書並系図」、阿波藩全般の社寺・宗教・土地・民事を記載した「阿波藩民政資料」の筆写本、宝暦年間の徳島城周辺の地図など330点が展示され入場者の注目を集めた。

その他附属図書館長 竹治教授所蔵の阿波藩の儒学者・増田立軒、那波魯堂の遺著18部67冊も特別に展観された。

またマイクロリーダーも設置しマイクロフィルムで読むコーナーも作った。

入場者は学外者を含めて536名と、多くの人たちが来場し、好評のうちに閉会した。

これを機会に徳島大学附属図書館所蔵郷土資料目録(B5版 56頁)を刊行した。

なお、今回の史料展の開催にあたり、本学の教育学部教授 丸山幸彦・教養部教授 石躍胤央の各先生にお世話になりました。厚く御礼申し上げます。



近世阿波の史料展展覧会場

第22回中国四国地区大学図書館 研究集会を終えて

第22回中国四国地区大学図書館研究集会がこのほど11月18日(木)～20日(金)の3日間、本学の当番で開催された。会場は、眉山会館(18日～19日)と本学附属図書館(20日)を使用して行い、本学職員14名を含めて75名、(参加館30館)の参加者によって熱心な討議が行われた。

内容は、毎年開催にあたる当番校が中心となってテーマを設定し、幹事館である広島大学と協議の上テーマが決定される。このテーマは、時代の進展に伴って喚起される大学図書館の実務に関する問題点が主に取り上げられる傾向が強く、今回の研究集会のテーマも学術審議会より文部大臣に答申のあった「今後における学術情報システムの在り方について」をうけて昭和56年3月に発表された「学術情報センターシステム開発調査概要(昭和55年度)」に適応した「情報化社会の中の大学図書館の将来像を探る」とし、このテーマを中心に3日間の研究集会が行われた訳で主な日程と内容は次のとおりである。

第1日 18日(木) 9:00～17:00

特別講演

演題 大学図書館の再生

講師 京都産業大学教授

小田 泰正

実情報告

洋書目録作業の機械化実施
について

広島大学附属図書館

土肥 善嗣

研究発表

利用者指導と参考業務

島根大学附属図書館

渡辺 正人

機械検索依頼者に対する必要最少限の質問事項

図書利用統計の機械処理—バッチ処理—

ブラウジングコーナー(自由討議)



京都産業大学教授

小田 泰正氏の特別講演

徳島大学附属図書館蔵本分館 村田 康彦

広島修道大学附属図書館 松井 隆幸

第2日 19日(木) 9:00～17:00

研究討議

第1分科会：情報検索業務

第2分科会：整理(目録)業務

第3分科会：コンピュータを導

入するまえに

第3日 20日(金) 9:00～17:00

特別講演

阿波藩の学問 徳島大学附

属図書館長 竹治 貞夫

全体会議

1. 分科会報告 2. まとめ 3. 次回への希望など 4. 見学

閉 会



第1分科会会場

以上が研究集会の日程と内容の概要であるが、講演・助言・研究発表・実情報告、そして分科会における発表内容は、すべて大学図書館の将来像をえがき、また、めざすものばかりであり、大学図書館が既に新しい時代に入っていることを参加者全員が切実に感じたことと思います。参加館の中で既に将来における情報化システムの先駆的活動を推進させている館、また、これらの状況に対応させるために模索している館もあり、総合すれば時代の流れは明らかに多様化する情報化社会に入っていることを指すものであると同時に、これらの流れに歩調を合わせ対応させることが不可欠な状況に置かれていることを、この研究集会は示唆していました。

また、これらの状況をうけて対応化を検討している館も各館の動向を汲むことができることで対応化の指針となったことと感じました。

今後益々進展する情報化時代に対し、我々館員は諸々の状勢を適確に把握し、対応化を進めなければならないことはいままでもなく各館相互の緊密化を、より一層深めることはこの研究集会が持つ大きな役割でないかと思われる。この研究集会は、参加者同志間でのコミュニケーションをよくすることは勿論、情報交換の場として最も適しているので、我々の手によって益々隆盛になるよう育成に努めなければならないと痛切に感じました。

以上をもって研究集会開催の実施報告とさせていただきます。

なお、研究集会の実施にあたって、会期中、第3分科会の中で講義と助言をいただきました本学工学部助教授 山本米雄先生ならびに、第1分科会でパネラーとして御参加いただきました本学医学部助手 妹尾 広正先生には、紙上を借りまして厚く御礼を申し上げます。

(尾原記)

目 次

徳島高工図書館追憶の記…………… 1	第22回中国四国地区大学図書館 研究集会を終えて…………… 8
講義ノートの思い出からの雑感…………… 2	
研究者のための国立大学図書館の 相互利用が円滑化…………… 4	会 議……………10
附属図書館第4回文化行事 「近世阿波の史料展」報告…………… 7	出 張……………10
	人事往来……………11
	来 館 者……………11
	編 集 後 記……………12

開 館 時 間

授 業 期		休 業 期	
月 ~ 金	土	月 ~ 金	土
9時～20時	9時～16時30分	9時～17時	9時～12時30分

編 集 後 記

文化行事、研究集会と大きい行事も無事終り、一年がアッという間に過ぎてしまったように感じます。

来春退官なさる、稲田教授に「図書館追憶の記」を執筆いただき図書館の歴史の一端を知ることが出来ます。今後一層、学習・研究の向上・発展に役立つ図書館でありたく思っています。

編集：発行 徳島大学附属図書館
 (〒770) 徳島市南常三島町2丁目1番地 徳島 (0886) 23-2310 内線 (338)